



Title	懷徳堂の思い出
Author(s)	小柳, ならみ
Citation	懷徳. 1986, 55, p. 84-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂の思い出

小柳ならみ

私の父は、山本楢信といい、明治三十四年一月大阪の

船場（安土町二丁目）の木綿問屋の長男として生れ、所謂、船場の「ぼん」から若だんさんとなり、空襲で家屋は焼失したが、家業よりも生涯懷徳堂を愛し、そして、昭和五十年十一月に死んだ。

戒名は、松寿院教養信道懷徳居士である。この戒名が示すとおり、父を語るには、懷徳堂なくしては語れないのである。

船場の商家では、長男に早く家業を覚えさせる為に、長男は大学へやらないという慣習があり、父も御多分にもれず、関西大倉商業を出て家業を覚えさせられたのであるが、祖父が、だんさんとして番頭を補佐役に、すべてを切りまわしていたため、若旦那として気楽な立場にあったことも手伝ってか、肝心の家業よりも学問の方が

好きで、懷徳堂へ通いつづけた。

船場のぼんの中には、南地などで派手に遊ぶ「ぼん」も多く、叔父達もよく遊んだそうだが、父は色気の方はとんと無関心で、専ら本を片手に講義をきき、家業にはあまり熱意を示さず、祖父に学者にすべきだったと嘆かせたものである。

高瀬武次郎先生の本の中にも父のことが書かれているし、以前に読んだ船場のことを書いた本の中にも「船場のぼんの中にも変り種がおって、家業のかたわら、懷徳堂へ通った学問好きなぼんもおった」と書かれている、そのぼんは父のことである。

私も幼い頃、どういうわけか、よく父に連れられて懷徳堂へ行った。二歳年下の弟（楢親）もよく連れられていった。寒い冬の夜など、本町橋を渡る時に風が冷たく

て、父につながれた手のぬくもりだけが温かったのを今でも覚えていて。足の速い父は、気がせくのかさささと速足で歩くので、私は小走りに息を切らしながらついて行ったものである。うす暗い懷徳堂の門から講堂に入ると、木の四、五人がけの椅子がずらりと並んでいて、私も父の横にちよこんと坐って講義をきいたものである。私語などする者は一人もおらず、全身を耳にしたように真剣にきいている人達の、そのびんと張りつめた緊張感のようなものが子供の私にまで伝わってきて、私も身を固くして聞いていた。黒板には、むつかしい漢字が書かれ、消され、又書かれた。生徒達は、厳しい顔でそれを写しとっていた。父が、私や弟に、あの黒板に書いてあるのをこの紙に写すようにと言ひ紙を渡されても、私は神童じゃないからその漢字も、むつかしい講義の内容もわからう筈もなく、ただ息をひそめてじっと講義の終るのを待っているのである。今の大学のラフな雰囲気、の講義とは、凡そかけはなれた真剣そのものの雰囲気の中で、ノートをとる鉛筆の音だけがかすかに聞えるだけである。そんな中で、たとえ子供でも小さい声でものを言ったり、動いたりしたらいけないということは子供ながらもわかっていたので、足がだるくなると、そととぶ

らぶら動かす位が関の山で、周囲の大人達のように、目を見開いて、私にとってはちんぷんかんぷんの講義を聞いていたのである。考えてみればこれでも講義を聞いたことにはなるわけで、恐らく私達が、懷徳堂の講義を聞いた者の中が一番若い生残りと言えるかも知れない。

父の懷徳堂の友人に、藤塚さん、酒井さん、中川さん等居られ、私達はよく可愛がっていたのだ。

又、時には、先生方の引率で外へ出かけることもあった。沢鴻久孝先生と一緒に吉野へ出かけた時、父も先生も足が速く、どんどん行ってしまわれ、私と弟とは残されてしまい心細い思いをしながら川原で石を投げたりして待っていたら、やがて皆戻ってこられて、ほっとしたこともあった。先生はいつも和服で、大きな四角い柎下駄をはかれ、食事の時は袂から箸紙に入った割箸を出され、それを使って食事をされていたのを覚えている。何故そうされていたのかわからないが、大手前女学校に入って国語の本をみたら、沢鴻久孝監修と書かれた本が教科書であって、あのおひげの先生は、えらい先生だったんだなあと改めて思ったものである。

又、父は、懷徳堂の講義が終ると、その先生方を家へお連れしておもてなしをし、泊っていかれる先生方もある。

り、なかには師弟の關係が家族ぐるみのおつき合ひに移行していく場合もあった。高瀬武次郎先生が書かれた「商いは、高利をとらず、正直に、よき品を売れ、末は繁盛。」と書かれた横長の大きな額は、我家の家訓として、店の間にでんとかけてあり、又、屋根の上には大理石の「綿ネル綿布卸 山本久商店」という看板も、高瀬先生の書であった。武内義雄先生などは、お嬢さん御夫妻とも親しくさせてもらっていたし、天沼先生は戦災で焼け出されてからも、泊りにおこしになった。

その懷徳堂も、私の家も、昭和二十年三月の大空襲により灰燼と化した。家も蔵も、皆焼けて何も残らなかつ

たのであるが、懷徳堂の書庫は残り、その中に、父が預けていた自分の日記と、岸田劉生が父の為に描いた、松竹梅の樹の下で童子が酒を汲みかわしている絵が描かれている掛軸が懷徳堂のおかげで残された。これが、戦前の船場の家と現在を結ぶ唯一の記念品となっている。

昔、一度絶えていた懷徳堂を、船場の町人の手で再興させたように、又、現代の社会にマッチした新しい形で「大阪商人の意気ここに在り」というような企画を、何とか考えられないものかと、すっかり様がわりした船場の街角に立って考えているのは、私一人であろうか。